永敬寺報（えいきょうじほう）

二〇一五年三月一日
第九十一号

みやこ町勝山黒田2809
電話（0930）32-2141

ご案内

春季彼岸会（ひがんえ）法要厳修

日時　三月二十二日（日）・二十三日（月）
　　昼一時～　夜七時三十分（二十二日のみ）～

おとき　二十二日（日）正午～

講師　熊本県　山田寺前住職
　　湯浅（ゆあさ）　成幸様

◎　春の気配（けはい）を感じる時節になりました。今月二十二日・二十三日に湯浅（ゆあさ）先生をお迎えして、彼岸法要をつとめます。

◎　講師の湯浅先生は一九三〇（昭和五）年生まれ。一昨年は大病を一度患（わず）われて心配をしましたが、今なお全国各地で布教をされています。

鹿児島別院輪番・教務所長や本山（東本願寺）同朋会館教導等を歴任され、その後、本山特派教導としても南米・ブラジル各地を一カ月間、巡回して布教されました。他にも教誨師（きょうかい）として昨年まで長年、刑務所訪問も続けられました。

×

◎　湯浅先生は昨年の春彼岸もお出でいただきました。八十歳を越えられましたが、以前と全く変わらず、本当に力強くお話をされていました。　「南無阿弥陀仏とはどういうことか」、他力の信心とはどういうことか」を話さずにはおられない、と言う気迫（きはく）を感じました。

◎　先生は著書の中で、「・・・念仏を生活の中でどういただき、あるいは念仏を自分の拠（よ）りどころとして、どう生きているかが問われています。・・お念仏によって生活が生き生きとしていないとすれば・・それはお祈り言葉に止（とど）まって、いのちを輝かすものとはなっていないのです。・・・たとい病気や災害に遭遇（そうぐう）しても、事実を事実として受け止め、その中から新しいいのちに目覚（めざ）めて生きる智慧（ちえ）をいただくのです。・・・南無阿弥陀仏ということは、単に個人的な救いではありません。個人の悩みだけを解決するものと言うことになれば、その教えは社会性を失ってしまいます。・・念仏しながら他者へのまなざし忘れたところに、「一人」の自覚はあり得ません。・・・この時代を生きるものとして、時代社会を離（はな）れて浄土の教えがあるのではありません。」と書かれています。

平成二十七年の年回忌

一周忌	平成26年寂	三回忌	平成25年寂
七回忌	平成21年	十三回忌	平成15年
十七回忌	平成11年	二十五回忌	平成　3年
三十三回忌	昭和58年	五十　回忌	昭和41年

丁度(ちょうど)よい　　藤場美津路

お前はお前で丁度良い　　顔も体も名前も姓(せい)も
お前にそれは丁度よい　　貧も富も親も子も
息子の嫁も その孫も　　それはお前に丁度よい
幸(こう)も不幸も喜びも　　悲しみさえも丁度よい
歩いたお前の人生は　　悪くもなければ良くもない
お前にとって丁度よい　　地獄へ行こうと極楽(ごくらく)へ行こうと
行ったところが丁度よい
うぬぼれる要(よう)もなく　　卑下(ひげ)する要もない
上もなければ下もない　　死ぬ月日さえも丁度よい
仏様と二人連れの人生　　丁度よくないはずがない
丁度よいと聞こえた時　　憶念(おくねん)の信が生まれる
南無阿弥陀仏

最近、『丁度よい』という詩を何度か目にしました。**良寛**さんが作られた詩と言われた時代もありましたが、実は石川県の真宗大谷派の坊守 **藤場美津路**さんが発表された詩でした。教員であった藤場さんは寺に嫁(とつ)がれましたが、長い間、仏法をいただけませんでした。藤場さんは自分を知識人と思い込み、自分勝手な生き方を続けられました。ある時、一人の先生の御法話を聞いて、高いところにいた自分を思い知りました。その後は仏様の教えを素直に受けとめ、心が落ち着き、寺の中に自分の居場所(いばしょ)を見つけました。努力しなくてもいいのですか。そのままで、いいのですか?」と言う疑問をもつ方もおられるでしょう。**この詩は葛藤(かっとう)の中で聞こえた仏様の慈愛の言葉を綴(つづ)ったものです。**藤場さんは、自分の人生を大切にしつつ、執着せずに生きることが大事で、**我慢(がまん)しなさいという安易(あんい)な現状肯定(こうてい)ではありません**」と書かれています。

・下段へ続く

その藤場さんが、『丁度よい』という詩を書く前（一人の先生に出会う前）、**我執**（がしゅう）の**つぶやき**』という詩を書かれています。参考までに掲載（けいさい）致します。

親ほど うっとうしい者はいない　兄弟ほど面倒な者はいない　子どもほどやっかいな者はいない　夫ほど平凡で薄情（はくじょう）な者はいない　姑（しゅうとめ）ほど邪魔なものはいない　だから離れ　軽蔑（けいべつ）し　嫌（きら）い　反発した　先生と宗教家ほど偽善（ぎぜん）的な者はいない　だから信じることがなかった

大嫌いな者は自分自身　愛そうとして愛しきれず　信じようとして信じきれず

ただ一人 孤独の淵（ふち）をのたうち回る こんな人間は生きている価値がないと思った

それは真っ暗い地獄をはいずり回っている気持ちだった

どうにでもなれ　なるようになれ　斜（しゃ）に構えた やけくそ人生　死ぬに死なれず

生きるに生きられず

1／12　仏教婦人会開催

七草がゆ、甘酒、抹茶などをおいしく いただきました。

お勤めの後、行橋市でインド料理店『ガラムガラム』を経営していますシャルマ氏のお話を聞きました。三世（過去、現在、未来）を見すえて生きることや、心静かに自分を見つめる瞑想（めいそう）の効果などを話して頂きました。

恒例の**福引大会**も実施し、楽しい時間を過ごしました。

朝のお勤（つと）め・五分法話

毎朝七時から本堂にて、お勤めをしています。その後、五分法話をします。七時二十分には終わります。親鸞聖人（しんらんしょうにん）のご命日の二十八日は、お勤め・法話の後、**朝がゆ会**を実施しています。